

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト2

『観覧車』

目の前の係員は首を傾げ、目を見開いていた。「またか」そんな囁きが聞こえるようだった。背が高く、やけに姿勢のいい若い男である。サカイはその係員に応じるように頷き、再びゴンドラに乗り込んだ。

一度目、男は微笑を浮かべた。そして、二度目は疑問を覗かせた。きっと三度目は警戒心をおぼえることになるだろう、サカイはそう思った。

係員の反応はまったく正常だった。大の大人が一人で観覧車に乗る。しかも続けて二度。不審に思わない方がおかしい。三度目は彼に事情を説明しようか、そんなことを考えながら、サカイは浮上するゴンドラの中で緑と灰色の風景を眺めていた。

電話があったのは昨日のことだった。「明日の午後四時。観覧車で」それだけを告げると電話は切れた。女性の声だと思うが、名乗りもしなければ、具体的な依頼内容もない。いや、そもそもこれはサカイへの依頼の電話であったのかも判断できなかった。しかし、サカイは言われた通り観覧車に乗ることを選んだ。

ゴンドラは頂点を通過し、空を下降しはじめる。

一度目、サカイは必要以上に周囲に目を配った。電話の主がどこからかこちらを見ているのではないかと考えたのだ。

二度目は自嘲した。ありきたりの悪戯だったかと思うようになっていた。そう考えるのがもっとも自然であるような気がするし、また、そう決めつけることで、この観覧車から離れたくもあった。踊らされた私を影で笑っていようが構わないさ——サカイはふんと鼻を鳴らすのだった。

地上に到着すると、係員の男は憐れんだような笑みを頬に染み込ませていた。その表情が気にかかった。

「もしかすると、きみなのか？ 私の依頼者は」

「依頼者？」彼は一度目と同じようにまた首を傾げた。「なんだかよくわかりませんが、たった一人で二度も観覧車に乗るなんて——」

サカイは彼を見つめ、似たような笑みを返した。

「何がいいだろう」

「え？」

「失恋したという理由はどうか」

「失恋ですって？ お客さん、そんな感傷的な人には見えませんが……あ、失礼でした

か」

「いいや、別に」

彼はすまなそうに少し腰を折り、取り繕うように言った。

「でも……否定できない面もありますね。この仕事をしていると、そんな人をたまに見かけます」

「きみもその一人？」

「まさか。僕は失恋しても絶対に観覧車なんか乗りませんね。だって、同じところに戻ってくるんですよ。数分前と何も変わらないこの場所に」

「だったら、もしきみが失恋したならどうするんだ？」

「そうですね」と、彼は回転するゴンドラを見上げた。「僕だったら、手当たり次第、知り合いに電話をかけて、くだらない話をして憂さを晴らすかな」

「じゃあ私は、そうして憂さ晴らしに付き合わされた一人なんだろうな」

「——え？」

サカイはぼかんとしている係員を見つめ、そして言った。

「もう一度、乗っても構わないか」

三度目の彼の顔には警戒ではなく、困惑が貼りついていていた。

それは、サカイが今もっとも浮かべたい表情でもあった。なぜ三度も観覧車に乗るのか自分でもよくわからない。

ゴンドラは夕暮れの中を揺れ続け、また同じ場所に戻るだろう——。

(了)